

紀 要

第 9 号

1 9 9 6 . 3

財団法人滋賀県文化財保護協会

目 次

序

‘廃棄’を考えるー貝塚出土資料の検討にあたっての試論ー〔鈴木康二〕	1
粟津湖底遺跡第3貝塚の貝類採取活動ーセタシジミの成長速度と年齢構成ー〔稲葉正子〕	11
大津市粟津湖底遺跡出土の錘〔瀬口眞司〕	16
篋状木製品の用途について〔松澤 修〕	25
縄文晩期土器棺墓の調査方法についてー近畿地方の場合ー〔中村健二〕	38
近江における弥生社会の理解にむけてーその方法と課題ー〔大崎康文〕	42
長浜市域における弥生時代の石器ー今川東遺跡出土石器を中心にー〔稲葉隆宣〕	51
石組みの煙道を持つカマドー古代の暖房施設試論ー〔上垣幸徳・松室孝樹〕	57
集落遺跡出土の鉄製品についての研究ノート〔田井中洋介〕	79
近江へのアプローチ・その3ー野洲・栗太をフィールドにー〔近江歴史クラブ〕	85
1. 野洲川流域の前・中期古墳について〔鈴木桃代〕	89
2. 栗太・野洲における後期古墳の類型的把握 ー古墳時代システム論への墓制的アプローチー〔細川修平〕	94
3. 集落遺跡から見た古墳時代の特質ー古墳時代システム論への予察ー〔細川修平〕	102
4. 栗太・野洲郡における掘立柱建物データの抽出と分類〔神保忠宏〕	110
5. 近江国の古代駅路と官衙遺跡について〔内田保之〕	122
6. 古代における琵琶湖の湖上交通についての予察〔畑中英二〕	130
7. 田原道をめぐる二つの地域〔重岡 卓〕	136
8. 近江における玉造りをめぐって〔中村智孝〕	149
9. 栗太・野洲郡における古代の土器様相〔畑中英二〕	157
10. 鉄鉱石の採掘地と製鉄遺跡の関係についての試論 ー滋賀県の事例を中心にー〔大道和人〕	164
栗太・野洲郡のまとめ	179
大津北郊白鳳寺院の造営計画（その1）〔仲川 靖〕	185
古代遺跡と出土文字資料〔濱 修〕	200
石山国分遺跡出土瓦の覚書〔平井美典〕	208
巡礼者の宿ー鴨田遺跡出土の巡礼札よりー〔重田 勉〕	215
焼物二話〔稲垣正宏〕	220
蒲生稲寸氏についてー近江古代豪族ノート5ー〔大橋信弥〕	224
律令神話に於ける農業神について〔造酒 豊〕	233

日本古代の対外関係史の一様相

－日本古代史研究ノートあるいは覚書その2－〔芝池信幸〕	238
遺跡の撮影〔阿刀弘史〕	243
新聞報道にみる文化財保護25年－新聞記事データベースの作成と利用－〔中川正人〕	252

遺跡の撮影

阿刀弘史

1. はじめに

毎年たくさんの遺跡が発掘されるが、そのほとんどは開発に伴うものであり、発掘調査後は破壊され、消滅する運命にある。そしてそれらの遺跡を記録・保存するのが、我々発掘に携わる者の仕事である。そのために実測図や写真を利用している訳だが、なぜか写真に対しては、少し腰が引けてしまう人が多いように思われる。写真の意義はわかっているのに撮影はするけれども、「何かおかしい」と思いながらも何となく納得してしまっている場合が多いのではないだろうか。

このような状況を改善し、よりよい記録保存を行うために、奈良国立文化財研究所では毎年埋蔵文化財写真の研修を行っている。当協会からもこれまでに二名が参加し、研究会で研修内容の報告を行った。その際に、実際にどうすればいいのか知りたい、あるいはどうしたらもっと良い写真が撮れるのか知りたい、という意見が出されていた。そこで本稿では、繰り返しでありかつ受け売りではあるが、研修で受けた講義をもとにして、特に「遺構の撮影」に絞って、よりよい写真撮影のための留意点を紹介する。本稿が、現場での写真撮影の一助になれば幸いである。

2. 「良い写真」とは？

よく、「良い写真が無くて………」ということを知る。では、「良い写真」とはどんな写真なのだろう。皆、おそらく何となくイメージはあるのだろうが、はっきりと答えられるだろうか。確かに芸術写真の分野では、この問いに対する答は非常に難しい。しかし、こと文化財写真、特に記録保存を目的とした我々においては、答は単純明快である。答は、「複写ができる写真⁽¹⁾」なのである。つまり、その写真をもう一度撮影しても、実物を撮影しているのと同様な仕上がりが期待できる写真が「良い写真」である、ということになる。そのためには、もとの写真は被写体の質感をリアルに伝えるものであり、被写体の持っている特徴や情報を十分に伝えるものでなくてはならない。もちろん、そのためには写真のみならず印刷までもが関わってくるわけで、それ故に網版よりもコロタイプが重視されている⁽²⁾のだが、いかに印刷技術が進歩したところで、もとの写真が良くなければその意味も無い。

では、その「良い写真」を撮影するために、どのようなことに気を付けたらよいのだろうか。まずは撮影に必要な道具を見つめることにしよう。

3. フィルムとカメラとレンズを知る

①フィルム

写真を撮るには、最低でもフィルムとカメラとレンズが必要である。しかし、これらも何を

使ってもいいというものではない。世の中にはたくさんのフィルムやカメラが存在しており、それらをうまく使うことで、少しは簡単に目標に近づくことが可能になるのである。

さて、我々が主に使用するフィルムには3種類ある。モノクローム、カラーネガ、カラーリバーサル（スライド）がそれである。ここで、この3種類の特徴と目的を確認しておこう。

モノクローム……いわゆる白黒フィルム。耐久性は3種類の中で最も優れている。自分で現像・焼き付けを行うことが容易である。長期保存に最適。

カラーネガ……最も普及しているフィルム。そのため、一般使用のものでも、比較的安定した能力を持つ。また、多少の露出の失敗はプリント段階で簡単に修正ができる。

プリントで鑑賞する場合、あるいは大きく引き伸ばしたり、たくさん焼き増しをする場合に最適。

カラーリバーサル…プロカメラマンの使用が多い。また、これからカラーネガ、モノクロームなどのフィルムを簡単に作るができる。厳密な露出決定を要求されるが、正確に撮影をすれば非常にシャープかつ深みのある写真となる。印刷原稿に最適。

これらの特徴を知っていれば、自ずと使い分け方が見えてこよう。我々の仕事が記録保存を目的とする以上、少なくともモノクロームでの撮影は必要である。正しく処理され保管されているモノクロームフィルムの寿命は100年以上、つまり写真の歴史と同じだけの期間の耐久性がすでに証明されている。また、報告書という刊行物を作らねばならないのだから、カラーで掲載したような遺構、あるいは講演会などで必要になりそうなカットなら、カラーリバーサルでの撮影も必要である。埋蔵文化財の場合、「プリントで鑑賞」というのはあまり無い。展示などで大伸ばしが必要になることはあるので、その可能性が考えられる遺構に対しては、カラーネガでの撮影も必要であろう。しかし、カラーリバーサルからダイレクトプリントをしたり、インターネガというカラーネガを作って焼き増しすることもできる⁽³⁾ので、機材に余裕が無ければ省略することは可能である。

フィルム感度については、低いほど情報量が多い。しかし、その分露出を開けなければならなかったり、シャッタースピードが遅くなったりする。感度100を基準に、可能な限り低くする、というように考えておけば良いだろう。中にはコダック・テクニカル・パンという、4×5に匹敵する能力をもったフィルムもあるが、現像が非常に難しく、外注で安定した仕上がりは期待しにくい。そこまでしなくても、ちゃんとした処理がされていればT-MAXやSSでも十分なものになる。なお、モノクロームの低感度フィルム、あるいはT-MAXなどの微粒子フィルムは、大体的場合、一見メリハリのない写真に見える。これは、白と黒の間にあるグレーを微妙な変化まで正確に記録してしまうために、白から黒への変化がなめらかすぎて、このように見えるのである。一般的には白と黒がはっきりした写真を好む人が多いが、コロタイプ印刷にはむしろな

めらかな方が向いている。白黒があまりにはっきりした写真は、印刷すると見づらくなることも多々ある。⁽⁵⁾

露出は写真の仕上がりを左右する重要な要素だが、それだけに難しい。特に画面内で明暗差が大きい場合は、明暗どちらに露出を合わせるべきか迷う。このような時には、使用フィルムがモノクロームの場合には、画面内の一番暗い所の露出を測り、それで得られた値から2.5段絞る。カラーリバーサルの場合は、一番明るい所を測り、その値から2.5段開ける。これで、画面内の明暗のかなりの部分まで記録することができる。

また、露出は合っているのが一番良いのは当然だが、多少の失敗なら救済は可能である。この場合、モノクローム、ネガカラーなら明るい方に外れた時、カラーリバーサルなら暗い方に外れた時に、プリント、あるいは印刷の段階で修正できる。前者は2段オーバーくらいまで、後者は1段アンダーくらいまでなら何とかなる。⁽⁶⁾逆の時にはかなり難しい。特にリバーサルはシビアなので、2段オーバーは致命傷である。

②カメラ

次に、カメラを見てみよう。カメラは、前章で述べた「良い写真」の条件の一つである「十分な情報量」ということに対応するためには、大きな判の方が圧倒的に有利である。同じ範囲を撮影しても、それを記録する粒子の数が多ければ多いほど、より細かな情報が記録される。⁽⁷⁾また、35mmを引き伸ばすのと4×5判を引き伸ばすのとでは、拡大率も違う。当然、拡大率が小さい、つまりフィルムが大きい方が粒子も荒れず、記録された情報を損なわない。そこで、本来ならば4×5判カメラの使用をお勧めしたいところだが、当協会の現場では主に6×7と35mmが使用されている。このシステムはそう簡単には変えられないので、せめて6×7が中心であるとの意識を持ちたい。35mmはあくまでメモであり、講演会用である。35mmで撮影したカットを引き伸ばして報告書に載せるのは、野帳の拡大コピーを報告書です、と言うのと同じことなのだ。

③レンズ

レンズについては、現場では基本的に標準（主に50mm）と広角（主に28～35mm）を使うことになるだろう。標準レンズは大体人間の目と同じ範囲を、広角レンズでは同じ場所から撮影した際により広い範囲を写し込むことができる。しかし、レンズの違いは写る範囲の差だけではない。そこで、標準レンズを基準として、広角・望遠・ズームの各レンズがどのような特徴を持っているのかまとめておく。

広角………広い範囲を写す。被写界深度が深い。遠近感が強調される。画面周辺部が歪む。

望遠………狭い範囲を写す。被写界深度が浅い。遠くのものと同くのものが見える。

広角・標準に較べて暗くなるので、あまり絞り込めない。歪みが少ない。

ズーム………広角から望遠までを1本でカバーできるため、荷物を減らすことができる。画面中央に較べて周辺部が暗くなる。解像力が劣る。⁽⁸⁾

まず、「被写界深度」を説明しておこう。「被写界深度」とは、「ピントが合っているように見える範囲」のことである。ここで誤解してはいけないのは、「ピントが合っている範囲」では

ない、ということである。どんなに優れたレンズでも、絶対にピントは1点にしか合わない。それ以外の部分は、「合っているように見える」だけなのだ。同様に、いまだに「絞り込めばピントが合う」と信じている人も多いようだが、これは間違いである。ほとんどのレンズは開放、つまり一番明るくした状態（絞り2.8～4）から2～4段絞った所（絞り5.6～16）で最も解像力が高くなるように設計されている。絞り込むと確かに近くから遠くまでピントが合ったように見える、つまり被写界深度が深くなるが、逆にそのために遠近感が無くなり、立体感が失われてしまう。さらに画面内の明暗差（これをコントラストという）が無くなり、のっぺりとした印象を与える。また、絞り込むことでシャッタースピードが遅くなりブレやすくなる。さらにカラーフィルムの場合、長時間露光によって色のバランスまでもが崩れてしまう。このように利点よりも欠点の方がはるかに多い。適当にピントを合わせて絞り込んで手持ちで1/15秒、なんてことをすれば、明らかに「良い写真が無い」、下手をすると「使いものにならない」という結果が待っている。露出で多少失敗しても救済措置はある。しかし、ブレとピンボケは救いようがない。くれぐれもピントは厳密に合わせるようにしたい。ではピントをどこに合わせればいいのか、またどうすればブレを防げるのか、ということだが、この点については後で改めてまとめる。

さて、「十分な情報量」という点から考えて、解像力の低いズームレンズが使えないのは一目瞭然である。また、広角レンズは広い範囲を狭い画面に押し込めるのだから歪むのは当たり前である。しかし現場が広い場合は、広角を使わざるを得ない。この場合、ただ漠然と撮影すると、何を伝えたいのか分からない写真になってしまう。そこで、一番中心となる部分、見せたい部分を真中やや下に持ってくる。手前に道路などがある時は、なるべくそれらはカットする。そうすると必然的に空や向こうの町並み、山などが画面に入ってくるが、これが遺跡の具体的な大きさ、環境などを生き生きと伝える要素なのである。もしもあまりに煩雑なようならプリント時、あるいは印刷時に、画面の上をカットするように指定すればいいだけのことである。画面下にまで余計なものが入っていると、広角ならではの遠近感の誇張によって、遺跡よりも手前のもののほうが強い印象を持ってしまう。遺跡があまりに手前で広がりすぎていてどうしても入らないとき以外は、むしろ空を入れる意識で撮影をする方が好結果が期待できる。もっとも、これも本来はやぐらなどで撮影高度をあげ、かつ大判のカメラでアオリと呼ばれる機能を使えば全て解決できることではあるのだが……。

4. 遺構撮影の実際

①光線

それでは、遺構を実際に撮影する場合、どのような点に気をつけながら行えばより良くなるのか、またどうすればトラブルを未然に防げるのかということをご紹介します。

まず平面撮影の場合、周囲の状況を見た上で撮影する方向を決める。この時に、中心となる遺構に対して、何時頃にどの方向から撮影すれば最も効果的か、ということを確認しておく。その目安となるのは光の方向であるが、遺構撮影の基本となる光線具合は逆光。さらに、ベストは半

⁽⁹⁾逆光である。この光線状態での撮影が最も立体感が得られ、色や質感も損なわれることがない。どうしてもそのような光線を得られない状況、例えば南向きのカマドなどは、夕方か朝ならば近い効果を得ることができる。また、方向を変えればこの光線状態を得られる時間帯がいくつかあるのなら、それに合わせて数カット撮影しておく、後で必要になったときに便利である。

天候は、すでにご承知の通り薄曇が最適である。とはいえ、これらの状況が完全にそろうことなど滅多に無いし、時間的余裕も無いことが多いだろう。そんな場合でも、これらの条件から完全に外れてしまわない限りは何とかなる。なお、この光線状態ではガリの目も非常に目立つので、これをうまく利用すればガリの目の方向によって遺構を浮き立たせることもできる。⁽¹⁰⁾「基本は半逆光」として覚えておくと良いだろう。

一方、断面撮影の基本は順光である。カメラが水平になるように立てて、断面とレンズ・フィルムが平行になるようにする。もしも断面が北向きならば、ストロボを使うか曇るまで待つ方が無難である。⁽¹¹⁾急ぐなら、画板に白い紙かアルミホイルを貼って、写す範囲に光を反射させれば何とかならなくはない。また、特に断面をカラーで撮影する場合には色の再現性が問題となるので、最初の1コマだけでもカラーチャート⁽¹²⁾を写し込んでおくと、後で便利である。

もちろんこれは断面写真に限ったことではなく、カラー撮影では常に最初の1コマにはカラーチャートを写す癖をつけておくと、プリントや印刷が似ても似付かぬ色で返ってくる、というような事態を防止し、また色校正もやりやすくなる。本来の土の色を知っているのは掘った本人だけであり、現像所も印刷会社も知らないのだから、違う色で返ってくるのが当たり前なのだ。しかしカラーチャートは世界共通なので、これに合わせてプリント・印刷してもらえば共通の基準になるわけである。

②セッティング

次にカメラをセッティングする。ブレないためには三脚とレリーズは必需品である。どうしても三脚が立てられないような位置ならともかく、「面倒くさい」という理由で三脚を使わないなら、記録保存のための「良い写真」とは永久に無縁である。また、三脚は常に脚で調整する。斜面に立てなければならぬことも多いだろうが、脚の長さをそれぞれ調節してカメラを水平にする。雲台は微調整用である。また、エレベーターも微調整用である。これを一杯に伸ばして使うのは、わざわざブレの原因を作っているのと同じである。どんなに頑丈な三脚でも、エレベーターを一杯に伸ばせば少しの振動でかなり揺れる。特にペンタックス67はシャッターショックが非常に大きいので、このような三脚に乗せた場合ほぼ100%ブレると思って間違いない。⁽¹³⁾そして、レリーズは必ず曲げて使う。レリーズが無ければ、セルフタイマーを使っても良い。ブレるのはシャッターを切る瞬間なので、なるべくなら手で直接押すのは避けた方が無難である。また、三脚の脚は1本を被写体、つまり遺跡に向けて、あとの2本の間に自分が入るようにする。脚を跨ぐように構えると、脚を引っかけてカメラを倒し、壊してしまうことがある。

ピントは、前章でも述べたとおり、厳密に合わせる。見せたいものが1箇所なら、勿論そこに合わせれば良い。前後に広がっているなら、前後を1：3くらいの割合で分けられる点にピント

を合わせて少し絞れば、被写界深度の関係で、遠近感を失わずにある程度は写すことができる。ただし、どうするにせよアオリを使わない限り、前後に広がっている遺構の全面にピントを合わせることは不可能である。

なお、持ちやすいからだろうか、ついすべて横位置で撮影してしまうことがあるが、フィルムに余裕があるのならなるべく縦位置でも撮影しておくほうが、後々応用が効く。

③ピントのトラブル

目はなんともないのに、ピントが妙に合わせにくいことがある。この場合考えられる原因は3つある。1つめはレンズの結露。これは大きな温度差がある場所へカメラを移動した際に起きる。クーラーの効いた部屋からカメラを持ち出して真夏の炎天下で撮影、という場合などである。この場合、カメラ本体やレンズはもちろん、中のフィルムまでが露で濡れて反ってしまい、まともに写らなくなる。さらに濡れたフィルムがカメラとくっついて、巻き上げもできなくなる。それを強引に巻き上げれば、フィルムが切れるかカメラが壊れるかのどちらかである。対策としては、温度差のある場所で使用する場合、できれば1時間以上前に使用場所に出してその温度になじませる。フィルム自体も、普段は冷蔵庫で保管するが、使う1時間くらい前には出して温度に慣らしておくようにする。

2つめはフレアー。これは、真正面からの逆光や朝夕、それに冬場によく発生する。光が直接レンズの中に入ってきて中で乱反射を起こしてしまう現象である。この場合、被写体のコントラストも低下してしまうため、全体が白くぼやけたようになる。見極め方は簡単で、レンズの上に手や板をかざしてピントが合わせやすくなればフレアーである。これは、レンズ・フードを付けるか画板などをカメラの上にかざしてカメラに侵入してくる光をカットすれば普通に撮影できる。ただし、かざした板等が写ってしまわないように気を付けることが必要である。

3つめはカメラの故障。目が大丈夫で上記の条件にあてはまらなければ、そう考えられる。これには対処法等は無いので、素直に修理に出すしかない。ただし、なるべくまめにレンズキャップを付けることでレンズの傷などはかなり防止できる。これだけでもだいぶ違うので、面倒かもしれないが心がけてみてほしい。何にせよ、ピントがちゃんと合わせられない時には、何らかのトラブルが発生しているのである。

④季節の問題

春・秋はともかく、夏と冬には色々と困ったことが起きる。まず梅雨時には、湿気のために結露と同じ状態になることがある。また、場合によってはレンズにカビが生えることもある。これらはカメラケースに乾燥剤を入れておくことで防止できる。また、井戸の遺構の撮影などで、底に水が溜まっていることがある。溜まった水にカメラや撮影者、周囲の景色などが写り込んで煩雑になるようなら、カメラを三脚に固定し、シャッタースピードを1/8秒くらいにして、水に石を投げ込んで波立たせてシャッターを切れば良い。

また、好天が続くと乾燥して、遺構面が真白になることがある。この状態で逆光で撮影すると、ピットなどの影が強すぎて、周囲が白くトンでしまうか影が真黒につぶれるかのどちらかになる。

狭い範囲の撮影なら霧吹きやスポンジで湿らせてやるか、影の部分にストロボかレフ板で光を当てれば撮影できる。広い範囲なら、曇るまで待つか、あきらめるしかない。中途半端に水を撒くと、遺構面が訳の分からないムラで埋め尽くされてしまう。⁰⁹

冬には、まず前述のようなフレアーが起きやすくなる。また、フィルムはプラスチック製なので、静電気が発生しやすくなる。今にも雪が降りそうだからといって慌てて早く巻き上げると、内部で静電気が発生し、フィルムに感光してしまう。そうすると、フィルムに稲妻状、あるいは蜘蛛の巣状の線が縦横に走り、とても使えない状態になる。これへの対処法は、慌てずゆっくり巻き上げることしかない。万一雪が降ってきても、それほど強い雪でなければカメラをしっかりと固定し、1/2秒でシャッターを切れば雪は写らない。ただし、これも雪だけが動いてブレるために可能なのであって、カメラ自体が動いて全体がブレては話にならない。また、当然カメラも濡れてしまい、故障の可能性が高くなるので、本当は一番の正解は「雪なら撮影しないこと」である。

5. ブレとボケ

すでに何度か述べたように、ブレとボケだけは救済のしようがない。つまり、何よりも一番気を使うべき点なのである。ピンボケを防ぐためには前述のように結露やフレアーを防ぎ、温度や湿度に気を使えばおおよそ大丈夫とは思いますが、それでも自信が無ければ、いっそのことカメラから被写体までの距離を巻尺などで測って、その値をそのまま設定すれば良い。冗談のように思えるかも知れないが、周囲が暗すぎてピント合わせが困難な場合などには非常に有効な手段である。なお、ピント合わせは常に両目を開けて行う。片目でカメラを覗いているだけだと、撮影範囲に余計なものがあっても気付かないことが多い。

ピントに較べてブレのほうはつい無頓着になりがちだが、それだけに頻繁に見られる問題である。手持ちでブレずに撮影できるシャッタースピードの大体の目安は、レンズの焦点距離分の1以下、つまり50mmのレンズなら1/60秒以下、ということらしいが、普通の人々が普通に手持ちで撮影した場合、ブレないのは1/500秒以下だそうだ。慣れた者が神経を使って撮影した場合でも、手持ちでは1/60秒以下のシャッタースピードでないとブレる可能性がかなり高いらしい。それより長い露光時間でも大丈夫だという人は、そのフィルムを四つ切以上の大きさに引き伸ばしてみしてほしい。ピントはしっかりと合わせたはずなのに、大抵少しぼんやりしているはずである。これは実はピントが正確に合っていないのではなく、ブレているのだ。ブレは、正確に三脚とレリーズを使えば簡単に防ぐことができる。「良い写真」への第一歩として、三脚とレリーズの使用を習慣づけたい。

もっとも、遺構によってはどうしても三脚が立てられない場合も出てくる。このような時には手持ちで撮影せざるを得ない。そこでその場合の注意点を挙げておこう。もちろん、シャッタースピードは可能な限り速い方が良い。

まず、カメラにソフト・ケースなどを付けている場合は、これは外しておく。風を受けて手に

当たったりして、意外にブレの原因になるのだ。そして、カメラは左手、つまりレンズを持つ手で支える。右手で握り込むと余計な力が入って、やはりブレの原因になる。右手は、シャッターを押すためだけに使う。「脇を締める」というのは誰でも知っていることだが、これにあまりに神経質になってガチガチになってしまうと、やはりかえって力が入ってブレる。肩の力を抜いて、脇を体に付ける、くらいの気持ちの方が良い。さらに片足を前に出し、顔はレンズと平行にする。これでかなりカメラは安定するはずだが、やはりできれば、三脚は無理でも一脚を使ったり、近くの石やガードレールなどのしっかりしたものにカメラを乗せたりした方がはるかに無難である。

6. おわりに

以上、研修での受講内容をおおまかにまとめて紹介してきた。これらのいくつかは自分で実際に実験してみたので確認済みだが、受け売りの部分も多い。そこで、ぜひ皆さんからのご意見・ご質問などをお寄せいただきたい。それらについて、お答えできることにはお答えし、不明な点に関しては問い合わせるなり実験するなどして、確認したいと思う。また、今回は遺構撮影に限って紹介したが、自分で遺物撮影もしてみたい、あるいは自分で現像や焼き付けをやってみたいという方も、ぜひご連絡いただきたい。慣ればそんなに難しくはないし、自分でやってみてこそ実感できることも多くある。そのための施設も調査整理課にあるのだから、どんどん利用していただきたいと思う。

25周年を迎えた(財)滋賀県文化財保護協会が一体何カットの写真を保有しているのか、またそれらの写真はちゃんといつでも使える状態にあるのかわからないが、それでも毎年、そこに新たに撮影されたカットが加えられてゆく。しかしそれらは、ただ単に撮影すれば良いと言うものではなく、調査した遺跡の大切な記録であり、保存・維持していかなばならない資料である。そういう意識を常に持ちながらファインダーを覗き、シャッターを切れば、今までよりも「良い写真」に近づけるはずである。

註

- (1) 前提として、「～時代の～遺構」というようなタイトルをきちんと付けられる、つまりはっきりとした目的意識を持って撮影されていることが大切である。
- (2) 網版の写真を複写して引き伸ばすと網目も拡大されて、結果としてもとの写真の情報を損なってしまう。しかし現在では、コロタイプのできる印刷所は減少しており、一方網版の技術は進歩している。今後この傾向がますます進むようなら、ダブルトーンで200線以上を指定する方がリスクは少ないかもしれない。
- (3) 1～2枚ならダイレクト・プリントの方が安い。ちゃんと指定してやれば、色調の補正も可能である。大量にプリントを作るのなら、インターネガを作る方が安い。
- (4) 通常撮影に使用する場合、フィルム感度は25。
- (5) 「それにしてももう少しはっきりした方が・・・」という人は、カメラの感度設定を倍(例えばT-MAX 100なら200)に設定して撮影し、さらに現像に出すときにそのフィルムだけを別にして、「1段増感現像」と明記すれば、もう少しコントラストが上がる。
- (6) 正しい値が絞り11なら、シャッタースピードはそのままで、絞り8、5.6、4などがオーバー。16、22など

がアンダー。

- (7) 35mmに対して、6×7で約4倍、4×5ならば約13倍の面積がある。つまり、35mmフィルム1カットの粒子数を100とすれば、同じ景色を6×7なら400の、4×5なら1300の粒子で表現する。
- (8) 被写体を正確に記録・再現する能力。
- (9) 半逆光とは、斜め前方からの光をいう。
- (10) 遺構の内部と外部とで、ガリの方向を変える。
- (11) そうしないと、周囲や空が真白になってトンでしまう。また、それら周囲の真白な光が断面にかかってしまい、ぼやけたりにじんだりすることもある。
- (12) いくつかの色が印刷された、小さなスケール。コダックから発売されており、写真店に注文すれば入手できる。
- (13) できればミラー・アップ機能も併用することが望ましい。
- (14) フィルムは、冷暗所で保管しないとすぐに傷む。また、必要なだけ少しずつ購入するよりも、まとまった数を購入して使っていく方が安定した仕上がりになる。
- (15) どうしても撮らなければならないなら、モノクロームならT-MAXなどコントラストの低い低感度・微粒子のフィルムを、カラーリバーサルならコダックの感度100以下のフィルムを使うほうがまだだろう。コントラストが低くて解像力の高いフィルムなら、プリントのやり方次第で再現できる可能性もある。またコダックのカラーフィルムは白人の白い肌を生き生きと写せるように、少し赤みがかかった暖色系の発色をするのが特徴である。うまくいけば何とか写るかもしれない。しかし、基本的には対応するのは難しい。

編集後記

この冬は、久しぶりに雪の多い年となり、外での調査では寒さに堪える日々を過ごされたことと思います。今年は当協会設立25周年にあたり、日頃の調査や普及活動に加え、安土城考古博物館で、企画展示『いにしへの渡りびと—近江の渡来文化—』や、それと関連したシンポジウムを実施してまいりました。本紀要も25周年ということで、例年にくらべて多くの論考が集まりました。つきましては、多くの方からのご叱正とご指導を賜れば幸いです。 平成8年3月

平成8年3月

紀要第9号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(0775)48-9780・9781

印刷・製本 富士出版印刷株式会社
大津市札の辻4-20
Tel(0775)23-2580 Fax(0775)24-6668